

今、一部の感染症学者が憂慮しているのは、シベリアなどにある永久凍土が温暖化のために溶け始めていることである。永久凍土の中にはマンモスやトナカイの死骸、さらに旧ソ連時代に埋められた人々の死体などもあり、シベリアでは露出した死体に付着していた未知のウイルスの蔓延によって、数十人という規模ながら死者を出している。永久凍土の融解が進めば、爆発的に拡大する可能性がある。

人類の歴史を見ていくと、人口の増加にしろ、人の移動にしろ、未知の土地への進出にしろ、我々が何となく進歩や発展と幻想を抱いていた文明が様々な災いをもたらしてきた事実を知ることができる。地球環境は明らかに我々に警鐘を鳴らしている。文明の進歩をこのままただ手放しで喜んでいいのか。ここで一度立ち止まり、よく考えてみる必要があるようである。

我々は新型コロナウイルスとの闘いが、これからも長く続くことを覚悟する必要がある。人類が抑え込むことができたのは天然痘だけであり、他のウイルス、殊に新型コロナウイルスのように絶えず変異していくような厄介なウイルスの撲滅はまず不可能と覚悟しなくてはならない。人類は半永久的にうまく共存していくしか道はない。

今、医療界では新型コロナウイルスの予防薬であるワクチンの開発に全力を注いでいる。頭の下がる思いである。しかし、その完成までには1年から2年ほど必要だと言われている。今は、ワクチンの開発に過剰な期待を寄せるよりも、多くの人が自分でも気づかない間に集団免疫を獲得する、つまりウイルスに負けないだけの耐性をつけることが大切なのではなからうか。実際、人類はこれまで数々のウイルスをそのような方法で収めてきたはずである。

ウイルスに限ったことではないが、人間にとって厄介な存在を撲滅することに執心するばかりでなく、地球上の様々な生命とお互いによりよい関係を維持しつつ、生き延びていく。そういった共存の関係を作り上げていくことを考えなくてはいけない時機にきているように思う。

日本でウイルスの感染拡大が抑えられている理由の一つとして、清潔好きな国民性や独自の生活文化が挙げられている。ウイルスが流行しているという情報があれば予防のために誰もがマスクを着用し、ウイルスが好まない高温多湿なお風呂に毎日のように入る。外で履いていた靴は玄関で脱いでスリッパに履き替える。外出から帰ったときは手を洗う。こういった習慣に加えて握手、抱擁をしないでお辞儀で挨拶をするという非接触文化も感染防止に一役買っていることは間違いない。

もし、明治維新後、欧米の文化を完璧に取り入れて入浴は1週間にシャワーを3回程度、室内でも土足で生活するというような習慣が定着していたとしたら、感染はもっと国内で広まっていたかもしれない。先人たちは、結果としてウイルスと共存する知恵を身につけてきたと言える。我々日本人は、祖先が営々と築いてきた他にはない素晴らしい文化を見つめ直し、これまで以上に誇りを持つべきなのではなからうか。

いずれ感染が収束し普段通りに生活できる日がやってきたとしても、そこで安逸を貪るのではなく、今回の出来事を教訓にして常に新たな危機に備えなくてはならない。進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンは世界中を回っていろいろな生物環境を研究した結論として「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることができるのは変化できる者である」という有名な言葉を残している。

新型コロナウイルスが私たちに与えた教訓は、目の前の試練に柔軟に対応しながらそれを乗り越えていくこと、その度に新たな知恵や技術を身につけていくことなのではないかと思う。